ガンとたたかった十年間

死を見つめる心

岸本英夫

岸本英夫　1903年兵庫県明石生まれ。東京大学卒業後、ハーバード大学留学。東大教授、東大付属図書館長を兼任。文学博士。1954年渡米中ガンにおかされ、激務のなかで闘病十年、1964年1月逝去。本書はその闘病中の心の記録をまとめたもので、1964年度毎日出版文化賞受賞。主な著作「人間と宗教」他多数。

講談社文庫

死を見つめる心　ガンとたたかった十年間
岸本英夫
昭和48年3月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Miyo Kishimoto 1973
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

講談社文庫

死を見つめる心

ガンとたたかった十年間

岸本英夫

講談社

序にかえて

指折りかぞえてみると、すでに四十年をこえるのであるが、彼とわたしは、おなじ東大の文学部で宗教学を専攻する学生として交わりをもった。さきに声をかけたのはわたしだったというのが、彼の記憶するところであった。それ以来、ずっとおなじ道を歩いてきたのであるから、ずいぶんとながいあいだのつきあいである。そのながいつきあいのなかでも、最後のほぼ十年にわたる彼の生き方は、わたしにとって、まことに印象のふかい、感銘のふかいものであった。

ほぼ十年というのは、彼がガンを得てからのことである。その当時のことと、それに対処するために、いかに苦しみ、いかなる心組みを築いていったかは、本文のいくつかが、あますところなく語っているのであるから、もはや、わたしのいうべきところはない。ただ、わたしのいいたいことは、その間における彼の人間としての、おどろくほどの成長についてである。いや、それは、成長というような平板なことばでは、とうていいい表わしがたいものであった。パウロの書簡のなかに、「古きは既に過ぎ去り、視よ、新しくなりたり」という句があったことを、わたしは憶えているが、それは、そのような変貌であったといっても、けっしていい過ぎではなかった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わたしどもは、おたがい、宗教の学をやってきたのであるから、人間が死と対面することによって、ひるがえって、生を充実してゆくという生き方のあることを知っている。おそらくは、宗教的な生き方というものの極意は、その辺りに存するものであろうと思われる。道元禅師は、「志のいたらざるは、無常をおもはざるなり」といった。一遍上人の生き方は、「臨命終時」であったと聞いている。命終の時にのぞんだ心ばえで日々を生きるということである。ハイデッガーの『存在と時間』には、「死を手もとにかきよせて生きる」という意味のことばがあったことを、興味ふかく記憶している。だが、わたしどもは、ただ知っているだけであって、なかなか、それが生活の力となって実現するにいたらないのである。

しかるに、はからずも、ガンを得て、常時死と対面してあらねばならぬ状況下におかれた彼のそれからの生き方は、まったく刮目(かつもく)して見るに値するものであった。彼はけっしてくずおれなかった。冷静に死を見詰めながら、毅然として、また猛然として生きはじめた。その生き方は、じつに見事であった。人が変わったような立派な生き方であった。それ以前だって、すぐれた学者として、立派に生きてきたのであるが、いまや、その生き方には、あきらかに質的な変化があった。死と対面することによって生を充実するという、その生き方が、それからの彼の生き方であったからである。

一つの恥ずかしい思い出を書いておかねばならない。ある日、わたしは、彼とならんで自動車のなかに坐していた。なにに関してであったか、その前後のことは、まったく忘れてしまったが、「一大事とは、今日只今のことなり」という、あのことばをわたしが呟(つぶや)いた。隣りの席にい

た彼が、「うん、それなんだ」と応じた。あとで気がついて、わたしは恥ずかしかった。なんとなれば、わたしはただ他人のことばを語っただけであるのに、彼はそれを、そのころの日々の生き方のなかで生きているのだと知ったからである。

その生き方のなかで、もっとも特色のあった点は、幻想に酔うことがなかった、もしくは、酔うことができなかったという点であろう。また、不合理をにくむことは、はやい時期から、彼の生活態度の基石をなしていた。それらの点で、彼は、うたがいもなく、現代人であった。そして、そのうえに、現代人の新しい宗教的な生き方を、ゆるぎなく確立するというのが、彼の宗教の学のねらいであったが、はからずも、ガンを得て以後の、最後の十年にわたる彼の生き方は、それを、身をもって実現したものであった。その意味において、彼は、一つの新しい宗教的な生き方の範例をのこしたのである。

だが、彼はついに逝いた。一九六四年一月二十五日、ついにガンとの闘いにやぶれて死んだ。その送葬にあたっては、密葬において、本文のなかの「別れのとき」からの抜粋が朗読せられ、また、本葬においては、「わが生死観」の別刷が会葬者に配布せられた。それらを通して、彼のこした新しい宗教的な生き方の範例は、すでに、おおくの人々に感銘を与えたし、また、今後も、さらにひろい影響をもたらすであろう。

増谷文雄

目次

序にかえて　増谷文雄　三

I　死に出逢う心がまえ　九

わが生死観　11

別れのとき　24

私の心の宗教　35

II　癌とのたたかい　四九

アメリカで癌とたたかう　51

癌の再発とたたかいつつ　80

命ある限りゆたかに　92

III 現代人の生死観 …… 九七
生死観四態 99
死 120
現代人の生死観 137
人間と宗教 150
あとがき …… 高木きよ子 一九〇
父の死生観 …… 岸本雄二 一九五
主人の思い出 …… 岸本三世 二一四
文庫刊行によせて …… 二二六

I

死に出逢う心がまえ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わが生死観

——生命飢餓状態に身をおいて——

二つの立場

生死観を語る場合には、二つの立場がある。第一の場合は生死観を語るにあたって、自分自身にとっての問題はしばらく別として、人間一般の死の問題について考えようとする立場である。これは、いわば、一般的かつ観念的な生死観である。もちろん、自分も人間であるから、自分というものも、広い意味では、その中にはいっている。このような生死観も有用である。自分も含めた意味での人間の生死観の考え方を整理しておくことは、いざという場合の基礎的な知識となるからである。

しかし、もっと切実な緊迫したもう一つの立場がある。それは、自分自身の心が、生命飢餓状態におかれている場合の生死観である。腹の底から突きあげてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いてもたってもいられない状態におかれた場合の生死観である。ギリギリの死の巌頭にたって、必死でつかもうとする自分

の生死観である。

この第二の立場の場合には、第一の立場には含まれなかったもう一つのはげしい要素を加えている。それは、人間が健康で生命に対する自信にみちて、平安に日々の生活を営んでいる場合には、まったく、思いもかけない要素である。人間が、生命飢餓状態におかれた場合に現われてくる生命欲のはげしさである。生命欲は、生理心理的な一つの力である。いつでも人間の心の底に潜んでいるに相違ない。しかし、人間は、平生(へいぜい)はそれをそのままでは感じない。それがいざとなると、猛然と、その頭をもたげて来る。そして、はげしい生への執着となり、死に対する恐怖となって現われる。この要素を加えると、人間の生死観は、何か質的にも別個のものになったかと思われるほど、第一の観念的な立場とは、ことなってくる。

人間が生命飢餓状態に陥るのは、戦場に赴くとか、病気になるとか、自分の生存を続けてゆく見通しが断ちきられる場合に限る。それも目前の近い将来である場合に限る。生命の危険の場合におかれても、それを超えて生き続ける望みのある場合には、人間はその希望の方に重点をおいて、それを頼りにするので、生命飢餓感は、本格的には起ってこない。それが起ってくるのには、生存の見通しが絶望にならなければならない。死刑囚の刑が最終的に決定するとか、神風特攻に出かけてゆく日がきまるとか、癌で手遅れを宣告されるかというような場合である。死が目の前に迫り、もはやまったく絶望という意識が心を占有したときに、にわかに、心は生命飢餓状態になる。そして生命に対する執着、死に対する恐怖が、筆舌を超えたすさまじさで、心の中に起ってくる。このように生命飢餓状態というものは、生存の見通しに対する絶望がなければお

こってこないというところに、大きな特徴がある。

生命飢餓感は、食物に対する生理的な飢餓感に酷似している。胃袋に食物が満ちている時には、飢餓感を感じない。もちろん、人間は、満腹していても、食欲について語ることはできる。しかし、その場合の食欲は、食物の味のよいわるいというようなことに関連してくるに過ぎない。痛烈な飢餓感ではない。ところが胃袋に食物のない状態の人は、もっとほんとうに腹の減った苦しみに、なやまされている。それは、単に、観念的においしい食物のことを考えただけでは、けっして、いやされることのないものである。生命の飢餓感も、それと、まさに、同じである。明日も、あさっても、そしていつまでも生きてゆくことができると考えている人の心は、生命に満ちたりている。生命に対して飢餓は感じていない。それゆえ、そのような人は、観念的には、死の問題を考えても、生命飢餓状態におけるようなはげしい生命欲にさいなまされてはいないのである。

生命飢餓状態におかれた人間が、ワナワナしそうな膝がしらを抑えて、一生懸命に頑張りながら、観念的な生死観に求めるものは何であるか。何か、この直接的なはげしい死の脅威の攻勢に対して、抵抗するための力になるようなものがありはしないかということである。それに役立たないような考え方や観念の組立ては、すべて、無用の長物である。

生命の飢餓状態におかれて

私自身も、はじめから、そのような生命飢餓感を知っていたわけではない。外国の病院で、外国人の医者から、はからずも面と向かって癌の宣告をされたときに、それははじまった。

「あなたの病気は悪性腫瘍です。医者としてはあなたの生命を、半年までは保証することができます」

といわれた直後に、私は、自分が、そのような生命飢餓状態にはいっていることを知って驚いた。そして、それから、十年近くも癌の再発と闘い続けている間というもの、その生命飢餓状態のすさまじさを身をもって思い知ったのである。

このように自分の経験を通して、もう一度世の中を見わたしたとき、私は、さまざまな理由から、生命飢餓状態におかれて、心がさいなまれ、おそれおののいている人が、数多くいることを知った。

生命飢餓状態になった場合には、死との闘いは、もはや、単に観念的のものではない。死の恐怖は、人間の生理心理的構造のあらゆる場所に、細胞の一つ一つにまで、しみわたる。生命に対する執着は、藁の一筋にさえすがって、それによって迫ってくる死に抵抗しようとする。

私は、自分としては、上述のうちの第二の立場をとる。私自身にとっては、最近十年間にわたった癌の攻勢も、現在やや下火になっている。ここ半年ほどは、ことによると、癌で死なない

ですむのではないかとまで考えることができるようになった。したがって、私を、手負いの荒れ猪にしていた生命飢餓状態も、今日では、小康を保っているといえよう。

しかし、私は、ここで、生死観を考えるにあたって、人間が生命飢餓状態になった場合に、無用の長物になるような観念的要素は、すべて、問題の外におくこととする。そして、生命飢餓状態になった私自身にとって大映しになってきた問題だけにしぼって考えることにする。

生命飢餓状態に身をおいて考えてみると、平生は漠然と死の恐怖と考えていたことが、実は、二つの異なった要素を含んでいることがあきらかになる。その一つは、死そのものではなく、死にいたる人間の肉体の苦痛であり、他は、生命が断ちきられるということ、すなわち、死そのものに対するおそれである。

この二つは、質的には、まったく異なった要素でありながら、両者は、時間的には、ほとんど同時に、人間を襲ってくる。それで、多くの場合に、両者は混同されてしまう。

ところかまわず襲ってくる激痛、高熱、吐瀉、下痢、喀血、呼吸困難、このような思ってもゾッとするような苦痛なしには、この人間の肉体は、生命を失ってゆくことのできない場合が多い。それだけに心を奪われて、それだから自分は死ぬのがこわいのだと思っている素朴な人々も多い。

しかし、これは、前山の高さに気をとられて、そのうしろにひかえている真の高山を見あやまる考え方である。肉体の苦痛はいかにはげしくとも、生命を断たれることに対する恐怖は、それよりももっと大きい。生命飢餓状態におかれれば、人間は、どうしても、どんな苦しみの下にお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com